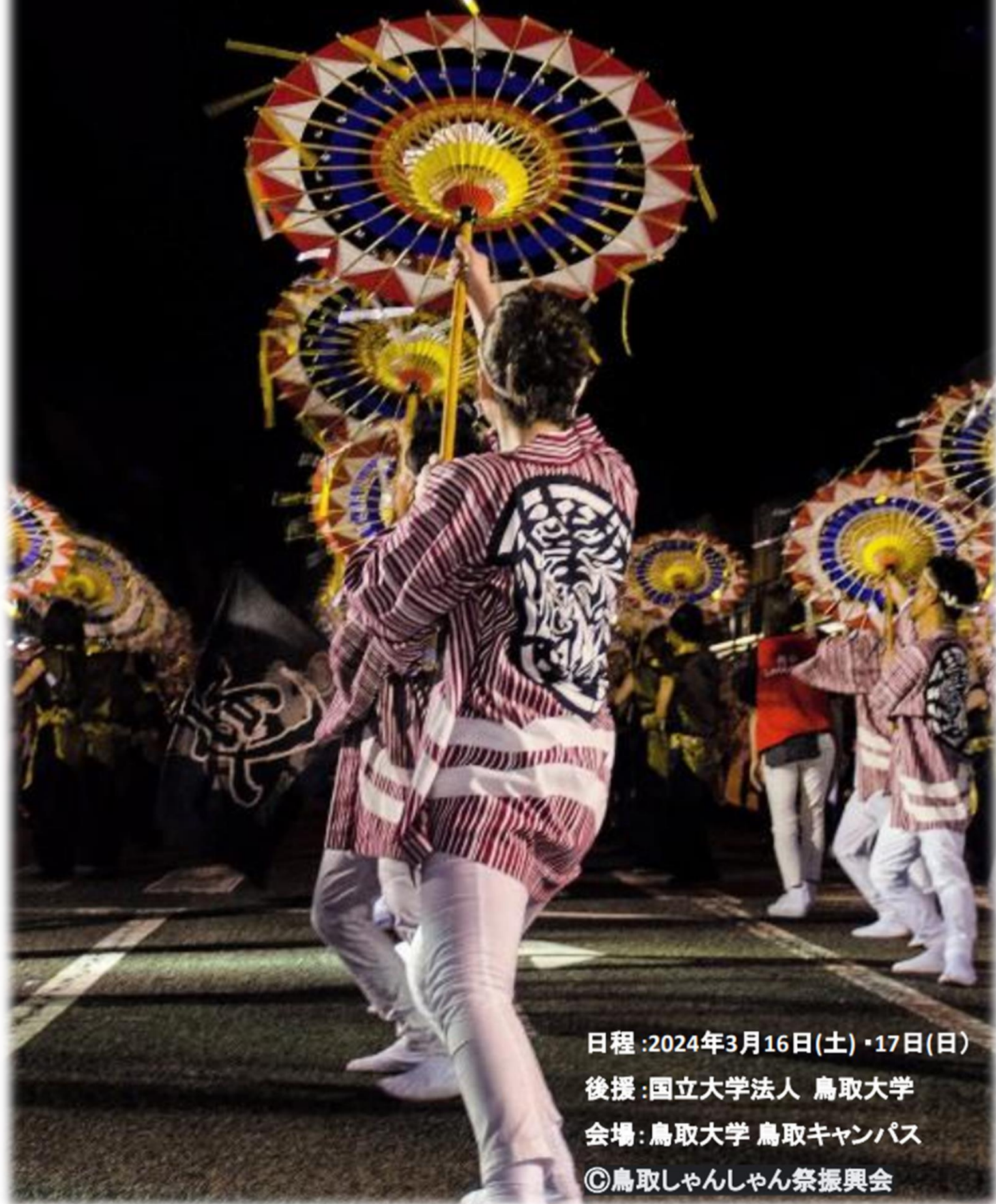


日本スポーツ人類学会

第25回記念大会プログラム・抄録集



日程:2024年3月16日(土)・17日(日)

後援:国立大学法人 鳥取大学

会場:鳥取大学 鳥取キャンパス

©鳥取しゃんしゃん祭振興会

日本スポーツ人類学会第 25 回記念大会 会長挨拶



筑波大学特命教授 / 環太平洋大学教授

会長 真田 久

日本スポーツ人類学会は 1998 年 12 月に設立されました。初代会長は岸野雄三先生で、翌年度 2000 年 3 月に早稲田大学所沢キャンパスで第一回大会が開催されました。この大会では「エスニック・スポーツと観光人類学」というテーマでシンポジウムが行われ、一般研究では 8 演題が発表されました。それから四半世紀を経た本年、第 25 回記念大会の一般研究発表は 23 演題ですので、大学院生も含めたスポーツ人類学の研究者は確実に増えています。本学会の発展にご尽力くださいました会員の皆様に、厚く感謝申し上げます。日本において、スポーツを文化人類学的に本格的に研究されたのは、寒川恒夫先生（本学会第二代会長）による学位論文『稲作民伝承遊戯の文化史的考察：東アジア、東南アジアを中心にして』（筑波大学、1981 年）が最初です。そこでは東アジアと東南アジアに行われる伝承遊戯（約婚球戯、蹴闘戯、ブランコ、綱引、競舟）を対象とし、それぞれの文化史的地位を特定されました。寒川氏の新しい視点でスポーツを文化的に位置付けた研究成果は、当時の若いスポーツ諸科学研究者に影響を与え、1988 年には日本体育学会に「スポーツ人類学専門分科会」が設けられ、1998 年に個別学会として日本スポーツ人類学会が設立されました。今日では体育学やスポーツ科学の一領域として定着し、高等学校保健体育の教科書にも、国際スポーツと民族スポーツの関係やメタコミュニケーションの考えなどが記載され、すべての高校生がスポーツ人類学の考えを学ぶまでになりました。

記念すべき第 25 回大会を鳥取大学にて開催する運びとなり、寒川先生の記念基調講演、そして台湾師範大学の林伯修先生の記念招聘講演が用意されました。本記念大会を節目として、さらなるスポーツ人類学の発展を祈念したいと思います。

最後になりましたが、第 25 回記念大会名誉実行委員長で鳥取大学副学長の山口武視先生、実行委員長の瀬戸邦弘先生はじめ、関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

会場校挨拶

日本スポーツ人類学会第 25 回記念大会の開催、誠におめでとうございます。このような記念すべき大会を、鳥取大学にて開催できること心より嬉しく思っております。2020 年に突然世界中が未曾有の新型コロナウイルスパンデミックに見舞われ、私たちは長らく、制限された辛い時期を経験しました。コロナが収束方向に向かう中、2024 年はその幕開けとともに我が国では「令和 6 年能登半島地震」が発生し、2 か月が過ぎた現在も、被災地では癒えぬ傷を抱えながら、多くの皆様が復興に向けて直前に頑張っておられます。21 世紀が始まり、四半世紀を迎えようとしておりますが、このようにいつ何時起こるかわからない、そんな時代に突入してしまったと感じる事が多くなったように思います。一方で、だからこそ、今回、このように皆さまを鳥取にお迎えできることが如何に「有難い」ことなのかを、身をもって感じている次第です。

我県、鳥取は鳥取砂丘などの自然をはじめ、美味しいものや温泉などにも恵まれた「思ったよりも」風光明媚で豊かな場所と自負しております。今回の来鳥がご参集になられた皆様の良き思い出の 1 項となりますよう、そして明日からの活力の源になりますように祈っております。

鳥取大学理事(教育担当)・副学長 山口武視

日本スポーツ人類学会第 25 回記念大会の開催おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。また、25 回目という節目に当たる大会を鳥取大学で開催いただけます事、教養教育センター長として、感謝申し上げますとともに心から歓迎いたします。さて、文部科学省が「教養」を表して「広い視野と深い配慮を背景にして、様々な価値の尺度について判断する人文学の営みである」と定義していますが、そのように考えますと貴学会の研究領域である文化人類学とは、まさに教養のど真ん中に存在するものであろうかと思えます。その一方で、本学は総合大学の看板を掲げながらも、どちらかと言うと「理系」寄りの学部集合体にて、人文科学の大切さを認識しながらも、そこで紡がれる「知」を享受する事が難しい、そんな状況にあるといえます。そのような中で、貴学会が本学で開催されます事は、我々にとって大いに刺激的な出来事であり、生産的で重要な機会を得たと感じ・考えているところであります。

全国からご参集されました皆様が、この鳥取の地で、活発に議論を交し、交流され、親交を深められる事を心より祈っております。皆様にとりまして、鳥取での時間が思い出深いものになりますよう、鳥取大学関係者一同、心を込めてお待ち申し上げます。

鳥取大学教養教育センター長・教授 小林昌博

日本スポーツ人類学会第 25 回記念大会 開催要項

1. 主催 日本スポーツ人類学会(第 25 回記念大会後援:国立大学法人鳥取大学)
2. 開催日 2024(令和 6)年 3 月 16 日(土)~17 日(日)
 - ・3 月 16 日(土)午後:一般研究発表、記念基調講演(寒川恒夫先生)、懇親会
 - ・3 月 17 日(日)午前:一般研究発表
 - 午後:記念招聘講演(林伯修先生)、シンポジウム、総会
3. 開催方法および会場 開催方法については原則的に「対面」での実施となります。
 【会場】鳥取大学鳥取キャンパス 〒680-8550 鳥取市湖山南 4-101

🗺️鳥取大学へのアクセス方法🗺️



※ 鳥取キャンパスは空港近くに位置しタクシーで 5 分!、徒歩でも 15 分程度です。



※ 鳥取駅からは JR 山陰線にて「鳥取大学前」駅に乗り継がれますと大変便利です。鳥大は「鳥取大学前」駅から徒歩 2 分です。尚、山陰線の本数が少ないため乗り継ぎダイヤのご確認をお願いします🗺️ (p.43 の時刻表をご参照ください)

※ 大学駐車場は 100 台以上駐車可(最初の 1h 無料、その後 100 円/h、24h 最高 500 円 2023 年 12 月現在)です。近隣の方はお車でお越しいただいても大丈夫です。

大会参加者の皆さまへ(発表に関するご案内)

1. 大会受付

<対面>

- ・場所:鳥取大学鳥取キャンパス共通教育棟 C (p.41 のキャンパスマップをご参照ください)
- ・時間:3月16日(土) 12:45~18:30 (受付は12:00開始)
3月17日(日) 9:00~16:30 (受付は8:30開始)
- ※ 受付デスクにて参加登録を行い、資料等をお受け取りください。

<オンライン>

- ・シンポジウムのみオンライン参加が可能です。オンライン参加に必要なウェブミーティング情報は、当日までにメールにてご連絡させていただきます。

2. 参加費

- ・一般:4,000円(会員・非会員とも)
- ・学生:2,000円(会員・非会員とも)
- ・高校生以下:無料とさせていただきます(本資格で口頭発表はできません)。
- ※ 「シンポジウム」のみオンラインで一般公開予定です。
 - ・シンポジウム一般(会員・非会員とも): 1000円
 - ・シンポジウム学生(会員・非会員とも): 500円
 - ・高校生以下:無料

3. 昼食

本校グルメマップ(p.42)、Google Map などをご参照ください。

4. その他

クロークをご用意いたしましたので、受付でお尋ねください。



酒津(さけのつ)のトンドウ(国指定重要無形民俗文化財)

https://www.torican.jp/festival/detail_1098.html

【研究発表に関するご案内】

1. 発表受付

- ・発表受付は、大会受付と共にお済ませください。
- ・パワーポイントを使用する場合は、USB メモリ等に保存したファイルをご持参いただき、休憩時間に各会場の発表用 PC にアップロードし、動作確認を行ってください（スタッフまでお申し付けください）。
- ・配布資料がある場合には 60 部ご持参いただき、受付スタッフにお渡しください。

2. 発表時間

- ・発表時間は 20 分（発表 15 分、質疑応答 5 分）です。
※大会開催の告知の際よりも 5 分短くなっております。
- ・発表終了 3 分前、発表終了時、質疑応答終了時にベルを鳴らします。
- ・次演者は、発表者席付近で待機してください。

3. 発表データの作成

- ・会場に用意する発表用 PC の OS は Windows 11、アプリケーションは PowerPoint 2019 を使用する予定です。動画をご使用など特段のケースを除き、ご自身の PC 接続はご遠慮いただきますようお願いいたします。



因幡の傘踊り（鳥取県指定無形民俗文化財）

<https://www.tbz.or.jp/inaba-manyou/event/1050/>

日本スポーツ人類学会 第 25 回記念大会プログラム

A 会場:C22

1 日目 3 月 16 日(土)

発表 番号	時 間	頁	演 題	発 表 者	座 長
A-1	12:45～ 13:05	p.17	仏印カンボジア保護国における学校体育導入期の教育体制II --カンボジア行政報(1918-26)の分析的考察--	山口 拓 (筑波大学)	橋本 彩 (学習院女子大学)
A-2	13:05～ 13:25	p.18	幼児期の開発教育 --“アフリカのお友達と遊ぼう!”の保育実践から--	野田章子 (長崎女子短期大学)	
A-3	13:25～ 13:45	p.19	在日韓国人学校における民族スポーツと教育に関する考察 :韓国の民族スポーツにみるアイデンティティ形成	玉川佳奈妥 (天理大学大学院)	
休 憩					
A-4	13:55～ 14:15	p.20	スポーツ人類学研究の「体育理論」への教育還元を試み ～民俗フットボールの教材的可能性を探る実践の取り組み(その2)～	岡田雄樹(京都教育大学) 吉田文久(日本福祉大学)	石井隆憲 (日本体育大学)
A-5	14:15～ 14:35	p.21	戦後日本における古武道の大衆化に関する試論 --趣味古武道の形成過程--	中嶋哲也(茨城大学) 田邊 元(富山大学)	
A-6	14:35～ 14:55	p.22	植民地期朝鮮に見られる日本武道の展開 -- 武道資料からの検証 --	朴 周鳳 (駿河台大学)	

※ この後、C 会場:C21にて 15 時 15 分～記念基調講演／16 時 20 分～鳥取大学食堂にて懇親会 あり。

2 日目 3 月 17 日(日)

発表 番号	時 間	頁	演 題	発 表 者	座 長
A-7	9:00～ 9:20	p.23	地域伝統芸能の伝承に関するスポーツ人類学的研究 - 東京ハイヤの変遷に着目して-	松本彰之 (日本体育大学)	高橋京子 (フェリス 女学院大学)
A-8	9:20～ 9:40	p.24	祭りの継承に関わる人びとと組織のあり方に関する人類学的研究 -- 富山県の獅子舞を対象として --	田邊 元 (富山大学)	
A-9	9:40～ 10:00	p.25	運動中の水分補給はいかにして常識となったか	石井隆憲 (日本体育大学)	川島浩平 (早稲田大学)
休 憩					
A-10	10:10～ 10:30	p.26- p.27	Flexible, Fungible, and Mutable Citizenship: -- Naturalization and Playing Basketball in and for Japan --	ピーターズ マイケル ケー (MICHAEL K. PETERS) (静岡大学 グローバル共創科学部)	川島浩平 (早稲田大学)
A-11	10:30～ 10:50	p.28	選手と観客から見たカヌースラローム競技eスポーツの可能性につ いての研究--2023ロンドンワールドカップ競技大会を事例に-	鄭 稼棋 (東京理科大学)	

※ この後、C 会場:C21にて 11 時 30 分～記念招聘講演／13 時 15 分～シンポジウム／16 時～総会 あり。

日本スポーツ人類学会 第 25 回記念大会プログラム B 会場:D21

1 日目 3 月 16 日(土)

発表番号	時間	頁	演題	発表者	座長
B-1	12:45～ 13:05	p.29	明治期の神戸におけるスポーツの受容過程とその影響 :1868-1912	YANG Jikang (早稲田大学 スポーツ科学研究科)	田邊元 (富山大学)
B-2	13:05～ 13:25	p.30	現代台湾における武徳殿の保存・継承・活用について	三宅智子 (天理大学大学院 体育学研究科)	
B-3	13:25～ 13:45	p.31	民俗芸能の情報保存をめぐる困難 --おもに山形県飽海郡遊佐町の杉沢比山を事例として--	松田俊介 (東北芸術工科大学)	
休 憩					
B-4	13:55～ 14:15	p.32	魔術的信念と身体動作のかかわりに関する一考察 --京都今宮神社やすらい祭を事例として--	高橋京子 (フェリス学院大学)	波照間永子 (明治大学)
B-5	14:15～ 14:35	p.33	風流踊「新野の盆踊り」における扇の技法 --琉球舞踊・日本舞踊との比較--	小林敦子 (明治大学)	
B-6	14:35～ 14:55	p.34	韓国伝統舞踊《サルプリ・チュム》のスゴン(布)を用いる 技法と象徴性 --3つの流派を比較して--	蔡美京 (明治大学アジア太平洋 パフォーミング・アーツ研 究所研究員)	

※ この後、C 会場:C21にて 15 時 15 分～記念基調講演／16 時 20 分～鳥取大学食堂にて懇親会 あり。

2 日目 3 月 17 日(日)

発表番号	時間	頁	演題	発表者	座長
B-7	9:00～ 9:20	p.35	中国武術「門戸」における実践者のアイデンティティ形成に対する伝 統武術訓練場の役割 --実践者の空間認識から--	李恩熙 (日本体育大学大学院)	鄭稼棋 (東京理科大学)
B-8	9:20～ 9:40	p.36	北京市における剣道(ジェンダオ)クラブの設立とその広がり	渡邊孝士郎 (日本体育大学大学院)	
B-9	9:40～ 10:00	p.37	台湾文化創出におけるエクストリームスポーツ活用の背景 -文化創意に着目して-	豊島誠也 (広島大学大学院)	
休 憩					
B-10	10:10～ 10:30	p.38	開発ディスコースにおける大型獣狩りの多層的意味を探る --東アフリカ・マサイの語りを中心に--	田 暁潔 (筑波大学)	田里千代 (天理大学)
B-11	10:30～ 10:50	p.39	「鍛えすぎた」女性たちへのまなざし --中国における女性ボディビルダーの参与観察--	楊 俐楠 (早稲田大学 スポーツ研究科)	
B-12	10:50～ 11:10	p.40	ローマ帝政前期における運動競技祭と選手 --「二流」の選手を中心に--	阿部 衛 (東京大学大学院 総合文化研究科 学術研究員)	

※ この後、C 会場:C21にて 11 時 30 分～記念招聘講演／13 時 15 分～シンポジウム／16 時～総会 あり。

日本スポーツ人類学会 第25回記念大会プログラム C会場:C21

1日目 3月16日(土)

時間	頁	演題	演者
15:15~16:00	p.9	【記念基調講演】明治の「からだ」 :エスノサイエンス身体論からサイエンス身体論へ	寒川恒夫 (早稲田大学名誉教授/ 静岡産業大学特任教授)
休憩(食堂へ移動)			
16:30~18:30		懇親会(場所:鳥取大学食堂)	

2日目 3月17日(日)

時間	頁	演題	演者
11:30~12:15	p.10	【記念招聘講演】台湾水源部落太魯閣族のスポーツ文化観光	林 伯修 (國立臺灣師範大學運動休閒與餐旅管理研究所 副教授)
休憩			
13:15~13:35	p.11	【シンポジウム】 応援団のミライ 応援団と言う近代日本文化を考える 「はじめに」	司会・ファシリテーター: 瀬戸邦弘(鳥取大学 准教授)
13:35~13:55	p.12	「応援を人類学から見てみる」	丹羽典生 (国立民族学博物館 教授)
13:55~14:10	p.13	「応援を日本文化に翳してみる」	瀬戸邦弘 (鳥取大学 准教授)
14:10~14:25	p.14- p.15	「応援を伝統校で実践してみる」	橋井哲朗 (鳥取県立米子西高等学校 教頭)
14:25~14:40	p.16	「応援を文化の枠で語ってみる」	筒井 京 (香川県教育委員会事務局 高校教育課)
休憩			
14:50~15:50		討論会	
16:00~16:30		総会	

3月16日(土) 15:15~16:00 (場所 C会場:C21)

明治の「からだ」:エスノサイエンス身体論からサイエンス身体論へ



早稲田大学名誉教授 / 静岡産業大学特任教授

寒川 恒夫

明治という時代は、それまでの諸時代と比べて、日本人が突出して変化を経験した時代であった。変化は生活と文化の多方面に亘り、政府が率先して変化を主導したのも特異であった。その意図された変化の中に「からだ」についての認識も重要問題として含まれていた。近代社会への適応要件とみなされたからであったが、明治5年に始まる義務教育の「学制」と明治6年の「徴兵制」とを直接的な契機とし、そしていずれも「体操」が関わっていた。「体操」は生理学が提供する「運動負荷に対する生体の適応反応」原理を利用して構築されたもので、効果が握力計や肺活量計などによって測定される「検証可能な科学的因果律」に基づいて可視化される強みを持っていた。こうした身体理解をサイエンス身体論と呼んでおこう。しかし、明治以前に日本でおこなわれていたのは形而上的な身体論であった。幕末と維新を生きた儒者ながら、いち早く西洋学を我が物とし、科学的精神の涵養を説いた阪谷素が明治8年の『明六雑誌』に「支那五行の説これが禍をなすなり」と中国の「気学」を断罪したように、日本でそれまで行われたのは「気をめぐる思弁的宇宙論」に基づく身体論であった。これをエスノサイエンス身体論と呼ぼう。このエスノサイエンス身体論は命を厳しくやり取りする武術においてきわめて強く要請されたもので、とりわけ近世の武術伝書には、種目と流派を問わず、この身体論が満ちている。基調講演では『猫の妙術』や『不動智神妙録』に語られた身体論の背景文化を仏教(特に禅)、儒教、道教に探り、中国には見られない「その日本的展開形」を抽出する。また、エスノサイエンス身体論の克服が明治初期にあって如何に困難を伴うものであったかの事例として、嘉納治五郎が柔道の創造過程で見せた葛藤を取り上げる。

3月17日(日) 11:30~12:15 (場所 C会場:C21)

台湾水源部落太魯閣族のスポーツ文化観光



国立臺灣師範大学運動休閒與餐旅管理研究所 副教授

林 伯修

まずは、日本スポーツ人類学会第25回記念大会にお招きいただきましてありがとうございます。記念大会に際してお話できる機会をいただき大変光栄です。まずは御礼とお祝い申し上げます。

さて、本発表は2019年から2023年までの3年間、国立台湾師範大学で林の担当する「レジャー・スポーツ人類学」の授業におけるスポーツ人類学の教育への活用に関する報告となります。尚、授業における参与観察は(授業内ということもあり)2-3日と短期間なものとなっていますが、研究対象地域である水源部落太魯閣族原住民の皆さんの協力もあり、たいへん内容の濃いものになっています。本日は、本調査にて得られた成果のうち「教育」「体験」「スポーツ・ツーリズム」3つの観点からご報告させていただきます。

まず、「教育」の視点ですが、ご存じの通り、台湾の総人口においては96%が漢民族であり、原住民族の人口比は2%にとどまるため台湾国内においても原住民文化とは、大げさに言えばひとつの“異文化”となります。そのために、履修生達は、この授業を通して同じ国の身近な“異文化”を知ることになります。

2点目として「体験」ですが、これは1点目とリンクするものとなりますが、たとえば、原住民達の知恵としての伝統的サバイバル術(罌づくりの技術や避難小屋づくり、山避難所やハンティング場の見学等)、身体文化としての魯閣族の舞踊の見学・体験、また、食文化(夜の川エビとり、竹筒飯とバナナ飯づくり等)等を経験します。彼らは実際に「体験」することから原住民文化を学ぶことになるのです。そして最後に、これらの原住民文化を「スポーツ・ツーリズム」という現代の文脈から学ぶこととなります。3点目に関しては本発表で詳しくお伝えします。

これらの学びを通して、履修者達は、原住民の伝統文化と現代生活、そして自身の文化との違いと共通点を理解し始めています。スポーツ人類学は身体を通じた活動を基に貴重な知見を得る学問であり、日本と同じように台湾でも重要な学びのスタイルとして活用されているのです。

3/17(日) 13:15~15:50 **C会場:C21**

【シンポジウム】

「応援団のミライ 近代日本文化としての応援団を考える」

●司会・ファシリテーター：瀬戸邦弘（鳥取大学 准教授）

●シンポジスト：

1. 応援を人類学から見てみる 丹羽典生（国立民族学博物館 教授）
2. 応援を日本文化に翳してみる 瀬戸邦弘（鳥取大学 准教授）
3. 応援を伝統校で実践してみる 橋井哲朗（鳥取県立米子西高校 教頭）
4. 応援を文化の枠で語ってみる 筒井 京（香川県教育委員会事務局 高校教育課）

明治期に端を発する応援団は、学校という近代空間のアイデンティティ醸成に深く関与してきた。一方で、昔ながらに受け継がれる彼らの世界は、時に「時代錯誤」とも評され、さまざまに注目されてきたところである。この令和の御代を迎えたこの国において、彼らが護り、そして求め続けるものはどのようなものだろうか。応援とは、応援団とは何か。その根源とミライについて考える。

「応援団のミライ 近代日本文化としての応援団を考える」

はじめに



司会・ファシリテーター：
瀬戸邦弘（鳥取大学 准教授）

本シンポジウムでは、近代日本における学校空間でどのように応援団と呼ばれる集団が形成され、育まれてきたのか、また現在どのような形でその文化や在り方が継承されているのか、彼らの矜持とは何か、フロアの皆様も含めて一緒に考えてみたいと考えております。

さて、あまり知られていないかもしれませんが、今回このシンポジウムが開催される山陰・鳥取県は、明治期に早くから「学問」の価値を高く認め、育んできた「学都」であり、鳥取西高校や米子東高校のように、全国に知られる文武両道の伝統校がいまも生き活きと躍動し、地域に、全国に活力を与え続けています。そして、その学校空間の中心には、いつも「応援団」が存在し、たとえば鳥取西高校の応援団は令和 5 年度で 109 代を数え、学校の核として存在・機能してきました。

今回、この「学都」にて、学校空間が育み、学校文化を育んできた「応援団」に注目したシンポジウムを開催することは大変意義深いことと感じています。さて、本シンポジウムには鳥取県立米子東高等学校・応援団 OB であり、同校で長く教鞭をとってきた橋井哲朗先生、国立民族学博物館の教授で「応援」という現象の研究を進めておられる丹羽典生先生、文化としての応援団の価値・存在を社会に問いかけてきた香川県教育委員会の筒井京先生を迎えいたしました。応援文化をよく御存知であり、またその実践者、そしてミライを常に考えておられる皆様とご一緒させていただきながら活発な意見交換を行い、また全国から参集する・参加する応援団関係者、研究者ともに議論を深めていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

